

第 1 章

ヨーロッパにおけるイノシシの管理

マルコ・アポロニオ

要 点

- ・イノシシはヨーロッパの高山帯から海辺までどのような環境にも生息しており、体重はイタリアでは 40kg 未満、ロシアでは 350kg 以上と非常に幅広い変異がある。
- ・ヨーロッパ全域で約 400 万頭のイノシシが生息していると考えられ、170 万頭ほどは狩猟により捕獲されているが、近年増加傾向にあり分布域も拡大している。
- ・イノシシ個体数に影響を与えるのは堅果類の豊凶や農地のトウモロコシの生産量であり、狩猟やオオカミによる捕食の影響は少ない。
- ・ヨーロッパのイノシシによる農業被害は約 108 億円に達している。
- ・市街地出没は 18 か国 100 都市以上で発生し、ベルリンやバルセロナでは大きな問題となり、専属の狩猟者が捕獲をしている例もある。
- ・ヨーロッパの狩猟には多くの課題がある。
解決のためには、良質な捕獲計画を策定することである。



1-1. はじめに

ヨーロッパでは、イノシシを中心に野生動物管理が直面している問題があります。最初に、ヨーロッパのイノシシの現状についてお話しします。現在のヨーロッパのイノシシは、旧北亜区（北極地方を除くヨーロッパ・サハラ砂漠以北の 아프리카及びヒマラヤ山脈以北のアジアの大部分からなる動物地理学上の地域）において最も広域に分布している陸上哺乳類の一つです（図1）。ヨーロッパでは非常にありふれた動物で、ほとんど



図1 旧大陸におけるイノシシの分布

の国に生息しています。イノシシの適応力は非常に高く、海にも山の上にもいます。イノシシの体サイズも非常に変異が大きく、体重についてはロシアでは 350 kg 以上もある一方で、私が働くイタリアのサルディニア地方では 40 kg 未満です。ヨーロッパのイノシシの分布域は広がっており（図 2）、密度も増加しています。分布域拡大と密度増加はヨーロッパ全土で起こっています。この分布域拡大と密度増加の傾向に沿ってイノシシ捕獲数も増大し、ヨーロッパのいくつかの国の捕獲数をグラフにしてみますと、全ての国で捕獲数が着実に増加しています（図 3）。

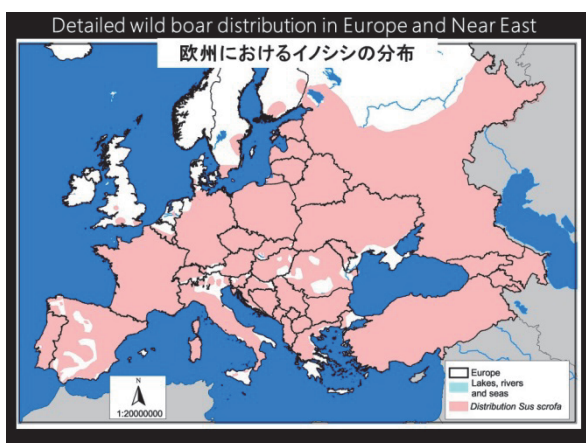


図 2 欧州におけるイノシシの分布

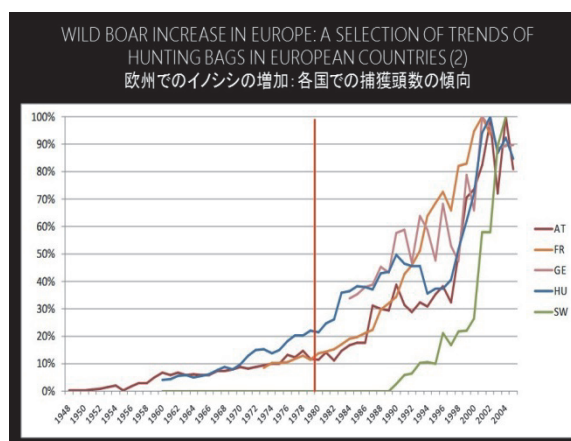


図 3 欧州におけるイノシシの捕獲数

1-2. ヨーロッパにおけるイノシシの増加要因

なぜイノシシは第二次大戦以降増加したのでしょうか？イタリアの例を挙げて、ヨーロッパでの経緯を説明します。イタリアでは、イノシシは 20 世紀初めには絶滅寸前でした（図 4）。しかし大戦後、イノシシは増加し始め、しかもそのスピードは速く、今ではイノシシのいない州は基本的に無い状態です（図 5）。なぜこのようなことが起こったのか、その原因は社会的・経済的な大きな変化が関係しています。図 6 は、1871 年、1921 年、1951 年のそれぞれの年以降に人口減少が始まったイタリアの地方自治体を示します。これらの自治体は、全て山間部などに集中しています。人々はこれらの地域を離れ、より良い生活とより良い仕事を求めて、多くは工業や都市部で働きました。その結果、山間部は農村環境から森林環境へと変化しました。図 7 の左の地図は、イタリアで 1960 年から 1990 年の間に起こった変化を示しています。赤い部分は土地利用が変化した地域を示しています。図 7 の右の地図は、土地利用の変化により国全体で以前より大きく森林が拡大したことを示しています。日本と同様に、このことがイノシシの分布と密度の大幅な増加の主要原因です。

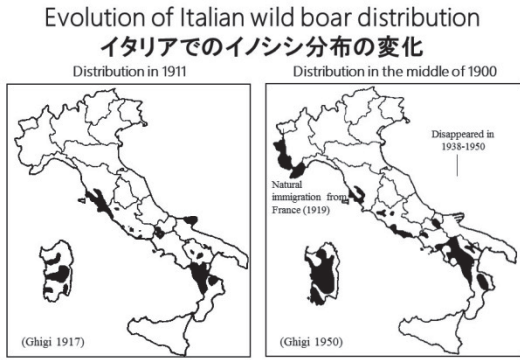


図 4 1900 年代におけるイタリアのイノシシ生息分布

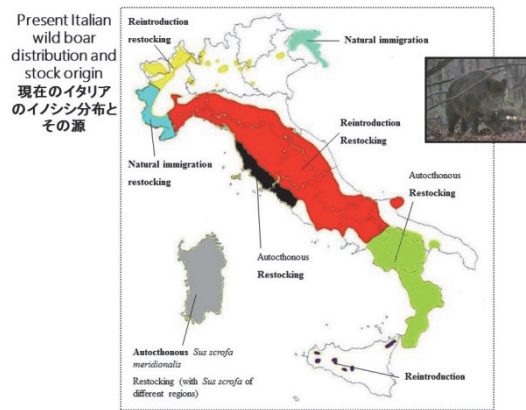


図 5 現在のイタリアのイノシシ生息分布

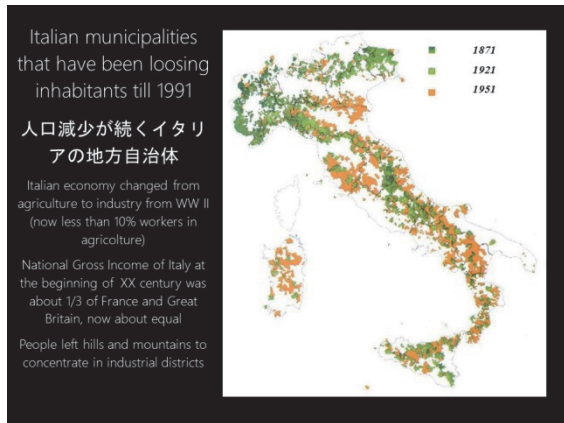


図 6 1871 年以降にイタリアの人口減少が続いている地域（自治体単位）

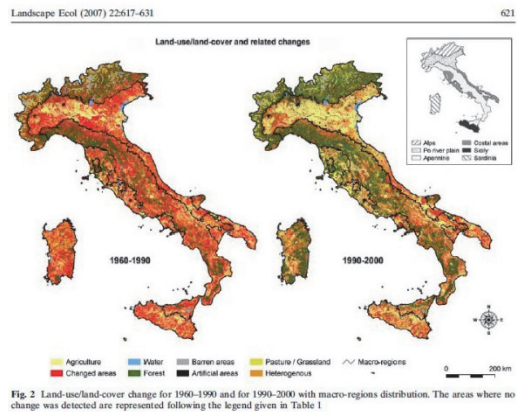


図 7 イタリアの環境変化

Faluccci et al. 2007

1-3. ヨーロッパにおけるイノシシ個体群の特徴

なぜイノシシはうまくやっているのでしょうか？こんな風に分布を拡大している生態学的な主要因はなんのでしょうか？イノシシは手っ取り早く餌資源を利用する種です。ある年には豊富でも別の年には乏しい餌資源を利用します。そういう餌資源の主な例は、ドングリやクリの実をつけるブナ科堅果類です。これらの樹種のヨーロッパでの分布を見ると、基本的にイノシシの分布と重なります（図 8）。つまり、イノシシはヨーロッパのこれらの樹種から膨大な恩恵を受けているのです。これらの樹種がイノシシの個体群動態にどのような影響を及ぼしているかについて、我々がイタリアで行った研究例をお話します。ある山のドングリ、クリ、ブナの実の生産量と狩猟期間のイノシシの捕獲頭数には、とても強い相関関係があることが、25 年間の調査で明らかになりました（図 9）。イノシシの個体群動態を左右する要素は、ナラやクリなどの堅果の生産量だった

のです。これらの樹種、特にそのうちの二種（トルコクヌギ、クリ）は、イノシシの個体群動態に非常に大きな影響を与えています。この二種が生えていない場所では、果実を生産する他の樹種が重要になります。地中海地方でいうとマスチック (*Pistacia lentiscus*) のような種です。

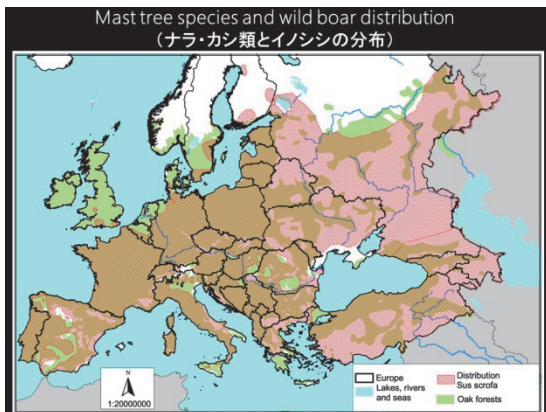


図 8 ヨーロッパにおけるブナ科堅果類とイノシシの分布

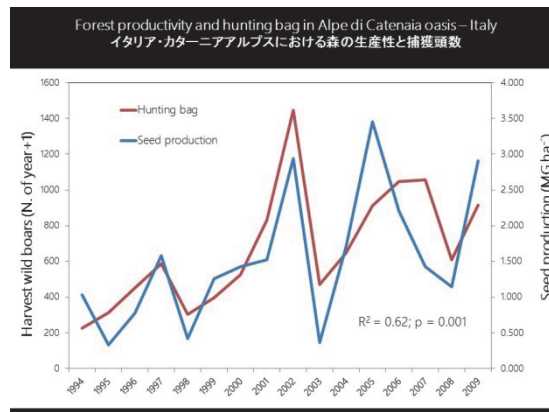


図 9 イタリアカターニャアルプスにおける堅果類の生産量とイノシシの捕獲

ヨーロッパには、環境が大きく改変された地域もあれば、トウモロコシが集約的に栽培されている畑のような地域もあります。以下はドイツの例です。図 10 のグラフに示す通り、ドイツではトウモロコシ生産量が大きく増加しました。つまりドイツのイノシシにとって毎々が堅果の豊作年のようになり、その結果としてイノシシの個体数が大幅に増加し、1950 年代後半から 2000 年代前半にかけて、捕獲数は約 20 倍になりました（図 11）。イノシシの個体群動態に大きく影響するもう一つの重要な要素は、気候です。イノシシは冬に地面に全く霜が降りない地域を好みます。図 12 は、ヨーロッパの 1 月の気候図です。ヨーロッパ全土で行われた調査によれば、1 月の平均気温とイノシシの密度には明確な相関が見て取れます（図 13）。この結果は、ヨーロッパでは、気候変動により、イノシシの個体数が増加し分布が拡大することをはっきり示しています。

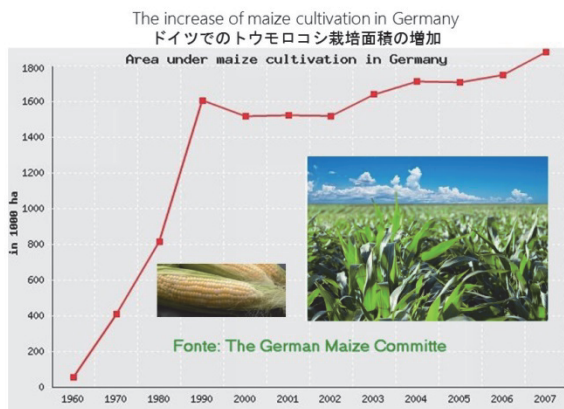


図 10 ドイツにおけるトウモロコシの耕作面積の推移

1957~2002年のドイツにおけるイノシシ捕獲頭数

Wild Boar Hunting Bag in Germany 1957 - 2002			
Year	Former West Germany	Former GDR, new counties	Total
1957/58	12.078	14.587	26.665
1967/68	27.316	37.805	65.121
1977/78	59.468	117.128	176.596
1987/88	84.581	130.700	215.281
1996/97	206.425	155.789	362.214
1999/2000	219.818	198.849	418.667
2000/2001	185.689	165.287	350.976
2001/2002	309.274	222.613	531.887

Quellen: DJV Handbuch 2003, BRIEDERMANN 1999

図 11 ドイツにおけるイノシシの捕獲数

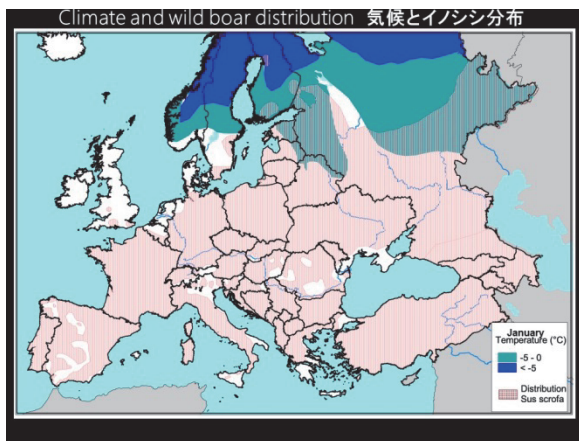
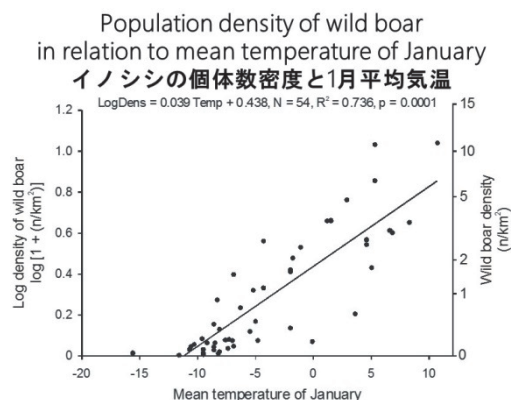


図 12 ヨーロッパのイノシシの分布と 1月の気温の分布



Source: Melis C., Szafranska P., Jędrzejewska B., Bartoń K. (2006) J. Biogeography

図 13 イノシシの個体数密度と 1月の平均気温の関係

ヨーロッパには 400 万頭のイノシシがおり、密度の高い国もあれば低い国もあります (図 1 4)。ヨーロッパにおいてイノシシは、個体数とバイオマスの面で 2 番目に重要な有蹄類です (図 1 5、1 6)。しかし、ヨーロッパのイノシシの個体数調査には問題があります。それは多くの異なる調査手法を使っているということです。雪上の痕跡確認、餌付け場所での直接観察、車を走らせながらのカウント、捕獲頭数等の手法を用いていますが、イノシシの個体数調査を完全にやめてしまった国もあります (図 1 7)。

そして我々は、イノシシの管理にあたって明らかな間違いを犯しました。これはとても有名な事例です。ハンガリーでは 1960 年から現在に至るまで毎年、カウントされたイノシシと同じ数だけ捕獲してきました (図 1 8)。これはイノシシの個体数を大きく過少推定していたためです。ハンガリーでの間違いを、イタリアやその他の多くの国でこれから行おうとしています。イタリアでは車からの個体数カウントを行います、信頼区間が広く、個体数を過小評価していると考えられています。

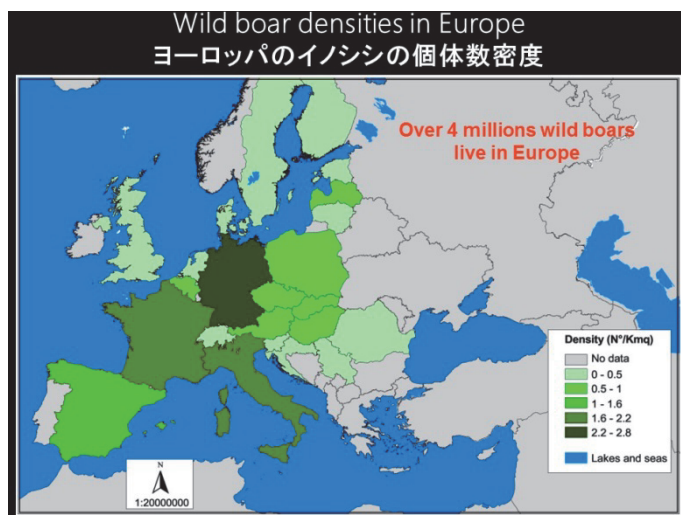


図 14 ヨーロッパにおけるイノシシの生息密度

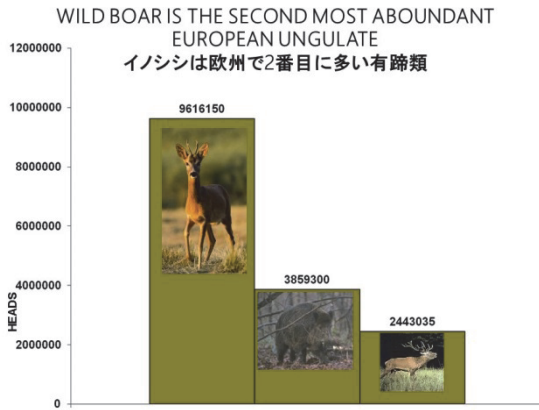


図 15 ヨーロッパにおける有蹄類の個体数比較

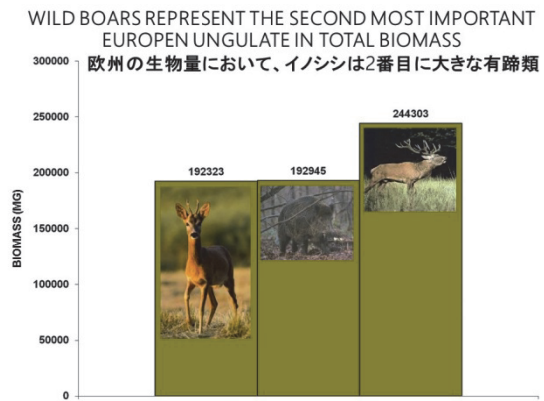


図 16 ヨーロッパにおける有蹄類のバイオマス量の比較

WILD BOAR COUNTS METHODS IN EUROPE
欧州でのイノシシの個体数調査方法

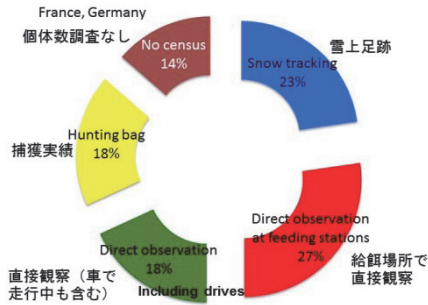


図 17 ヨーロッパにおけるイノシシの個体数調査方法

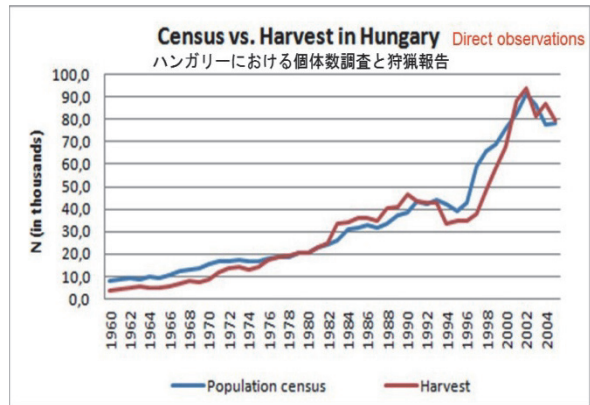


図 18 ハンガリーにおける個体数と捕獲数

1-4. ヨーロッパにおける人とイノシシの軋轢の現状

さて、イノシシがいることは、どのような問題をもたらすのでしょうか？四つの問題があります。農作物被害、交通事故、都市への出没、そして感染症の伝播です。

農作物被害

ヨーロッパでは毎年 8 千万ユーロ（約 108 億円）もの被害が出ています。我々は要望書を 2 年前に欧州議会に提出し、この状況を解決しようとしています。ヨーロッパのイノシシが自然の餌資源よりも農作物を好んで食べているからです。トウモロコシは、農作物の中でも特にイノシシに好まれます。イタリアやフランスでは、野生動物による農作物被害の 70~90%がイノシシによるものです（図 19、20）。また、図 21 はイタリアでの被害の割合を示しており、被害の 90%はイノシシによるものです。肉食獣がいる状況においても同様です。イタリアにはオオカミが多数生息し、家畜に被害を与えています。しかしオオカミによる被害は、イノシシによる被害に比べると信じられな

いぐらい低いものです。図19はイタリア中部のトスカーニ地方のものです。大型の捕食者がいない地域では、イノシシは家畜にとっても問題動物となります。例えば、イタリアのサルディニア地方では、子羊を捕食するイノシシがいます。オオカミのいない島では、イノシシが最も大きな被害をもたらす捕食者となっています。

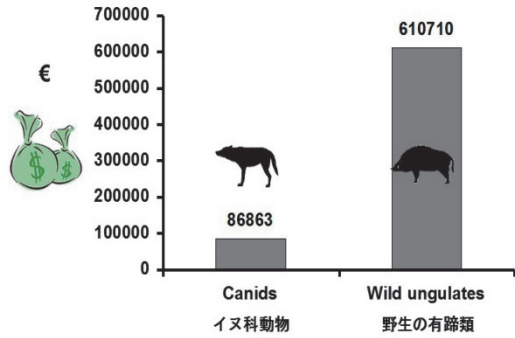


図19 イタリア・トスカーニ地方での被害補償額（1998-2001）

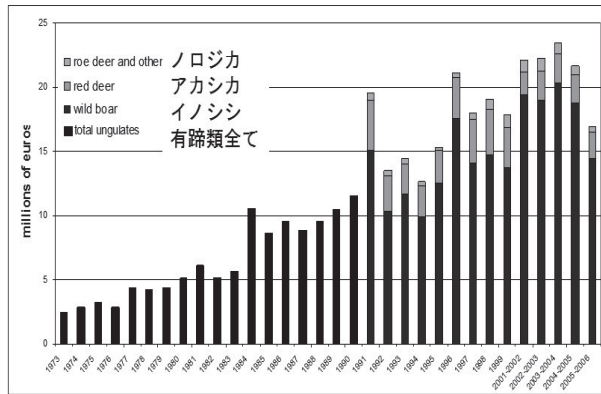


図20 フランスにおける野生動物の農業被害の補償金額

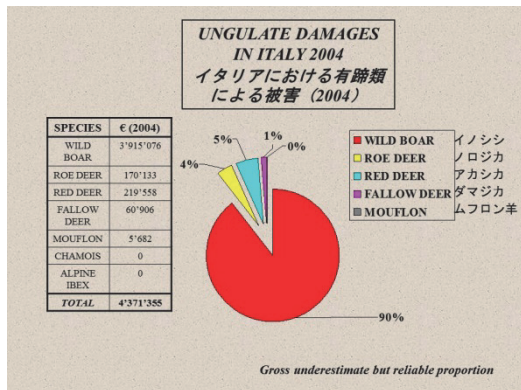


図21 イタリアにおける有蹄類の被害割合

DAMAGES TO LIVESTOCK 家畜への被害
The case of Sardinia (ITALY) イタリア・サルディニア地方の事例

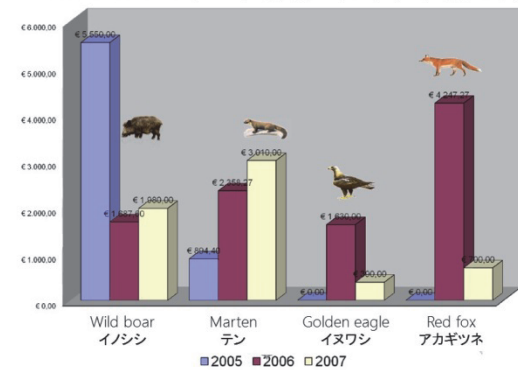


図22 イタリアにおける家畜被害の野生動物種ごとの補償額

交通事故

ヨーロッパでは多くの交通事故があり、多くの国々で統計がまとめられています。ヨーロッパ全体では、毎年100万頭の有蹄類が交通事故に遭っています。これは非常に大きな経済的損害をもたらしており、国ごとの損害額については図23に示す通りです。有蹄類との交通事故は、毎年死傷者が出るという甚大な人的被害ももたらしています。この観点から、野生動物との交通事故の中で、イノシシが占める割合について説明したいと思います。ある国のイノシシの推定数と交通事故数を比べると、他の動物と比較し

てイノシシがどれほど交通事故に遭いやすいかを示す比率を計算することができます(図24)。多かれ少なかれ、イノシシは平均的な状況だと言えます。他の種では、アカシカはより交通事故に遭いやすく、ムースは遭いにくいことが示されています(図24)。これは他の国でも似たような状況です。私自身でこの計算をして、このデータを示しています。例外的な事例もあり、イタリアのサルディニア地方では、交通事故に遭いやすい主な野生動物はイノシシで、交通事故の90%がイノシシによるものです(図25)。

(A) Estimation of the economic cost of such events are complex

野生動物との交通事故による経済的損失を推定するのは困難だけでも...

Estimated total costs per country
各国の年間の損失は？

- Slovenia about €15 million per annum スロベニア:1500万ユーロ
- Finland about €163 million per annum フィンランド:1億6300万ユーロ
- Sweden about €100 million per annum スウェーデン:1億ユーロ
- France about €100 million per annum フランス:1億ユーロ
- Germany about €440 million per annum ドイツ:4億4千万ユーロ

(B) 1% - 5% of reported road traffic accidents involving ungulates can result in human injury.

有蹄類に関わる交通事故で報告されたもののうち、1~5%は人身被害につながっている

Estimation per country
各国の年間の死傷者数の推定値は？

- Germany 25 humans killed and 2500 injured per annum
ドイツ:25人死亡、2500人負傷
- UK 12 humans killed and 550 injured per annum
イギリス:12人死亡、550人負傷
- Finland 3 humans killed and 215 injured per annum
フィンランド:3人死亡、215人負傷
- Spain 17 humans killed and 480 injured per annum
スペイン:17人死亡、480人負傷
- France 20 humans killed and 340 injured per annum
フランス:20人死亡、340人負傷

図 23 ヨーロッパにおける野生動物の交通事故の損失 (A) 被害額 (B) 被害者数

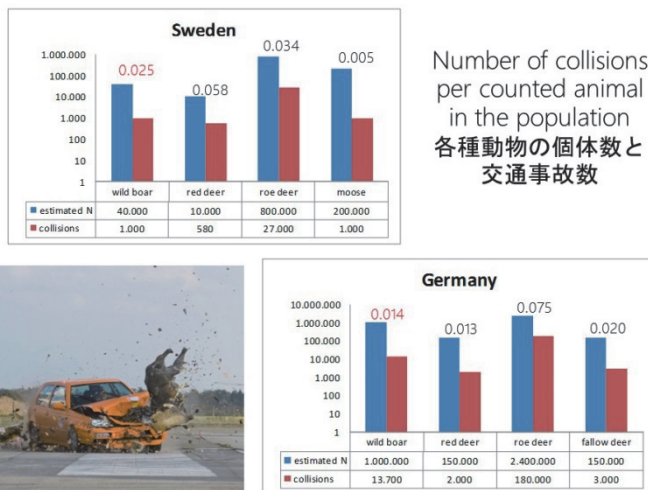


図 24 スウェーデンとドイツの野生動物の推定個体数と推定事故数及びその割合



図 25 イタリアにおける野生動物の交通事故割合

都市への出没

さて、神戸でもよく知られている問題について触れましょう。都市化したイノシシについてです。ヨーロッパでも、いくつかの都市がこの問題を抱えています。

一つはベルリンです。ベルリンは多くの村が集まってできた都市で、多くの緑や公園が都市の中にあります。その結果、ベルリンはとてもすてきな都市ですが、今は多くの都市化イノシシがおり、ざっと見積もって約1万頭が市内にいと推測されています。

もう一つはスペインのバルセロナです。バルセロナでは、イノシシが人々の住宅地を利用し、家のプールで泳ぐ姿も目撃されています。神戸と同様に、バルセロナも海に面した都市部のすぐ後ろ側に山が迫っています。夜にはイノシシがうろつき、街のあちこちで餌を食べ回っています。一般的に、イノシシは非常に適応力が高く、行動を柔軟に変化させることができるため、都市化動物になることが容易です。イノシシは人に馴れやすく、食べることにしても非常に柔軟性があり、何でも食べます。このような特徴があるため、ヨーロッパの18か国における100以上の都市がイノシシの問題を抱えており、ヨーロッパ全土として大きな問題になっています(図26)。主要な問題としては、交通事故、農作物や公園への被害、感染症伝播の危険性が挙げられます。特にダニが媒介する感染症やレプトスピラ症は、人々に重大な危険をもたらす恐れがあります。ヨーロッパの世論は、都市部においてイノシシは問題であるという認識です。イノシシは人々を襲う恐れがあり、また衛生面でも問題があるためです。実際には、それほど多くの問題が起きているわけではないのですが、実際に起きていることと人々の認識には差があるということでしょう。都市部のイノシシの捕獲を市民が許容するかどうかにつ

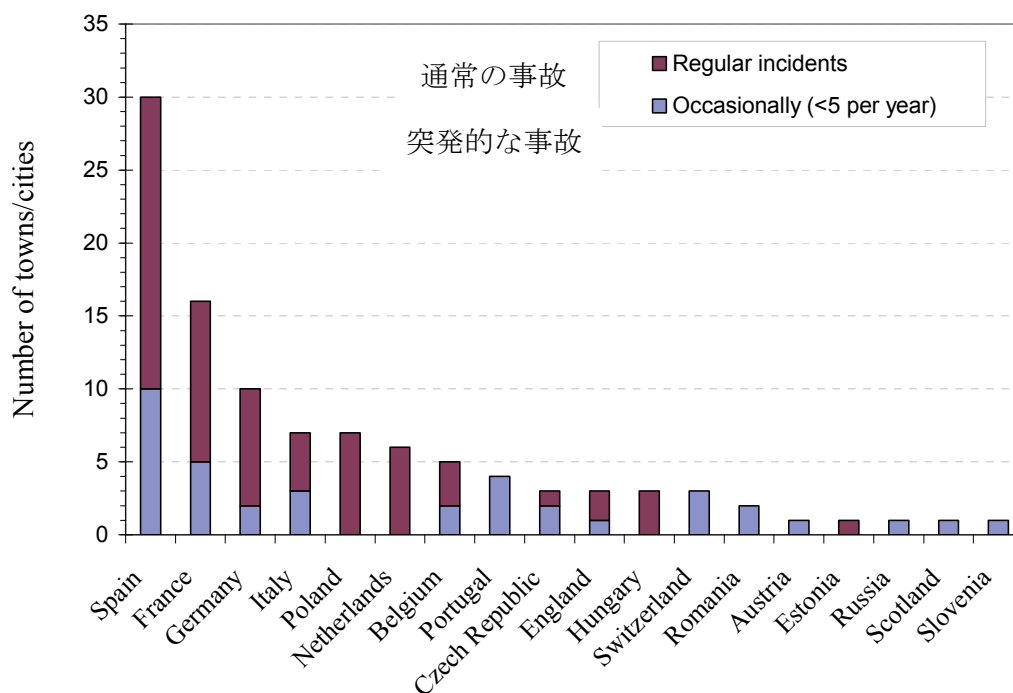


図26 ヨーロッパの都市や市街地におけるイノシシによる事故件数

いて、ベルリンで聞き取り調査したところ、ほとんどの人々が殺処分を伴う捕獲には反対という、興味深い結果が出ました。実際のところ、ヨーロッパでこういった問題を防ぐために行っていることは、罠や麻酔銃を使って捕まえてから他の地域で放獣するということです。しかし、この方法はあまり役に立ちません。移送して放獣されたイノシシはたいていの場合、都市部に戻ってくるからです。罠や麻酔銃で捕まえてから殺す、あるいは銃でその場で殺す、そのどちらかを特別に訓練された人々が行っています。例えばベルリンでは、3年前に市当局が訓練した37人のハンターには、公園や道路で問題を起こしているイノシシを夜間に狙撃することが許されました。

感染症の伝播

さらなる問題は感染症です。イノシシは多くの感染症を持ち込むことが可能です。図27に示したうち、上の二つのアフリカ豚コレラと豚コレラは、家畜のブタに感染し得るので、ブタの生産に大きく関わります。上から三つ目のオーエスキー病は、他の哺乳類にも感染し、例えば犬や感染した動物を捕食する肉食動物にとって危険です。下三つの感染症（結核、ブルセラ病、トリヒナ症）は人間にも感染することがあり、特に危険です。ヨーロッパでは、豚コレラとアフリカ豚コレラが、非常に大きな問題を起こしています。ヨーロッパの畜産業の多くはブタの生産を基本にしており、これらの感染症が発生した地域では、ブタの生産ができなくなる破滅的な状況になるからです。ヨーロッパでは、過去も現在においても、豚コレラとアフリカ豚コレラの両方が存在します。ごく最近、5年前ですが、コーカサス地方でアフリカ豚コレラが大流行しました。今でもヨーロッパの東端の国々は、アフリカ豚コレラに汚染されているのではと恐れています。欧州連合は汚染防ぐ努力をしており、我々はそれが可能となることを望んでいます。

Wild boar diseases and the risk for livestock and public health (from Ferroglio et al. 2011)

イノシシの病気と、家畜や公衆衛生へのリスク

Disease	Agent	Situation in Europe	Relevance	Main risk
African swine fever	Virus	Locally endemic in pigs	Heavy economic impact	Movement of wild and domestic animals; open air farming
Classic swine fever	Virus	Affects domestic pigs in several central and eastern Europe	Heavy economic impact	Movement of wild and domestic animals; wildlife overabundance
Aujeszky's disease	Virus	Endemic in domestic pigs	Heavy economic impact; conservation concerns	Movement of wild and domestic animals; wildlife overabundance; open air farming
Tuberculosis	Bacteria	Prevalence decreased, but asymptomatic in wild boar and deer	Heavy economic impact; zoonosis	Movement of wild and domestic animals; wildlife overabundance; open-air farming
Swine brucellosis	Bacteria	Present in domestic pigs, not yet controlled	Economic impact; zoonosis	Open-air farming
Trichinellosis	Parasite	Endemic in wild boar	Zoonosis	Open-air farming

図 27 イノシシが感染する疾病と家畜や公衆衛生上のリスク

1-5. ヨーロッパにおけるイノシシ管理

イノシシ管理として、基本的には三つの方法があります。

狩猟によるイノシシ管理

まずは狩猟です。我々の文明において、イノシシ猟はとて古くからある活動です。古代ギリシャや古代ローマ帝国以前の人々が、既にイノシシ猟をしていました。イノシシ猟はローマ人、その後の帝国、そして現在に至るまで引き継がれています。なぜイノシシ猟は、特に敬意を払われているのでしょうか？それは、イノシシ猟をするということは大なる勇気を意味しているからです（図28）。イノシシ、特に大きな個体は危険ですので、若者達にとっては鍛錬のようなものです。今でもヨーロッパでは、イノシシ猟はよく行われており、イノシシの主な死亡要因となっています。ヨーロッパのイノシシ個体群の死亡要因の85%は狩猟によるものです。

狩猟には三種類あります。「犬を使った／使わない巻き狩り」、「待ち伏せ猟」、「餌で誘引することによる待ち伏せ猟」の三つです（図29）。スペインをはじめとする国々では犬を使った巻き狩りを多用し、イノシシを含む多くの獲物を一度に得ます（図30）。



図28 ローマ帝国後期（5世紀）の絵

WILD BOAR HUNTING TECHNIQUES IN EUROPE
欧州でのイノシシ狩猟の方法

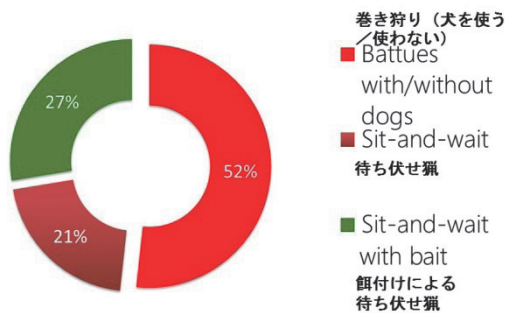


図29 ヨーロッパにおけるイノシシ猟の方法



図30 スペインの猟法モンテリア

イタリアやフランスに代表される国々では、イノシシだけを狙った特定の狩猟チームがあります。そういったチームでは、イノシシだけを追いかけるように犬を訓練します。上記2か国ではこの狩猟方法がごく一般的です。ドイツでは、餌で誘引して夜間に狩猟するという、非常に集約化された手法を用いています。

ヨーロッパでは毎年170万頭のイノシシが捕獲されており（図31）、このことは経済や個体数、個体群管理の面から多くのことを意味しています。しかし、非常に高い狩猟圧がかかっているにも関わらず、ドイツでは1平方キロメートルあたりに換算すると1~1.5頭のイノシシしか捕獲できていません

ESTIMATED NUMBER OF WILD BOAR HARVESTED IN EUROPE IN 2007 (in thousands).

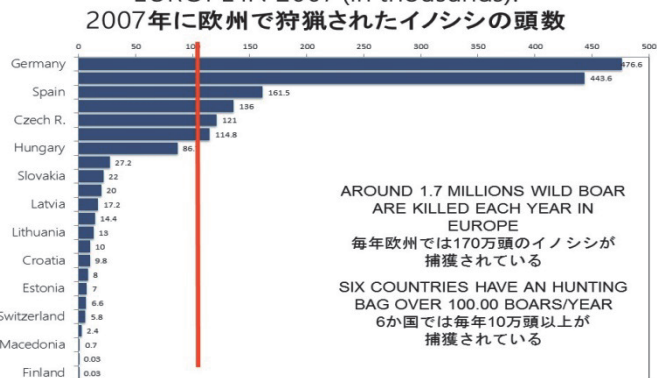


図31 ヨーロッパ各国でのイノシシの年間捕獲数

（図32）。ヨーロッパの狩猟には問題があります。第一に、各国で狩猟期間が大きく異なるということです。ハンターは、一年中狩猟できる国からイタリアのように3か月間しか狩猟できない国などあちこちに移動します。図33の地図に示す通り、狩猟が可能な月数には3か月、8か月、12か月があり、ヨーロッパ各国で大きく異なっています。

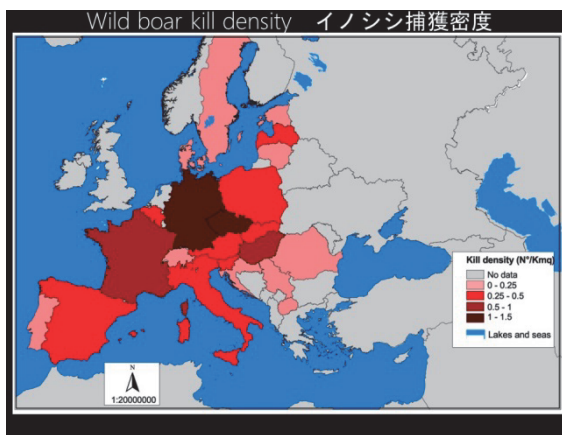


図32 ヨーロッパ各国でのイノシシの年間捕獲数

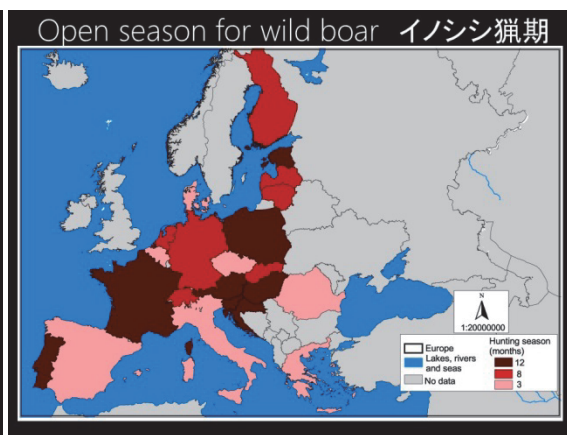


図33 ヨーロッパ各国でのイノシシの狩猟期間

さらに問題なのは、ヨーロッパ全体のハンターの数が、日本と同様に減少しており、イノシシは増えているということです。したがって、イノシシ個体数を減らすことは既に困難で、将来も非常に悲観的です。イタリアの例では、3か月の狩猟期間のうち1週間に3回しか狩猟できないので、狩猟では農作物被害を減らすことができません。イノシシが捕獲された数と、狩猟期間が終わった後に受けた被害額の間には相関関係はありませんでした（図34）。

そのため、より良い狩猟方法を探そうとたくさんの試行錯誤を重ねてきました。その中の最新のものの一つが、良質な管理計画の作成と良質な狩猟計画の作成です。

狩猟の問題は他にもあります。狩猟により、他の動物に関わる問題が起こっています。例えばシカの場合では、イノシシに対する集中的な狩猟により、シカが別の場所へと押し出され、高山帯の保護区内にとどまることがよくあります。このシカ個体群は、冬を高山帯の非常に苛酷な環境で過ごさざるを得ません。イノシシの個体群にとっても、集中的な狩猟によって社会構成

が攪乱される傾向があります。イタリアの我々の調査地でのデータでは、イノシシは家族グループで生活しています。したがって、グループ内の個体は遺伝的関係性が高いと理解しています。しかし、強い捕獲圧を受けたグループ内の成獣メス、1歳獣、0歳獣、の間の遺伝的関係性をは非常に低くなっていました。この結果は、捕獲圧の高い地域のグループは生き残り個体で構成されており、グループとしての結束は弱く、リーダーのいないグループは人間に被害をもたらす可能性がより高い、ということを示しています。

オオカミによるイノシシ個体群への影響

日本にはオオカミはいませんが、ヨーロッパにはオオカミがいます（図35）。イタリアやスペインなどの国々におけるオオカミの増加は、オオカミが餌としてイノシシに依存しているという事実と関係しています。イノシシは、オオカミにとって主要な食資源となる動物で、イノシシの増加はオオカミの増加に寄与します。しかし不運なことに、私たちの期待に反して、イノシシがオオカミの餌食となることは多くありません。図36は、オオカミが生息する地域と生息していない地域の事例ですが、両方の地域とも1月の平均気温がイノシシの生息密度に大きく関わっており、これら二本の線は非常に密接しています。この結果は、オオカミの捕食有無によって、イノシシの個体数密度に差はできない、ということを示しています。オオカミにとってイノシシは重要です。しかし少なくともヨーロッパ中南部では、オオカミはイノシシにとって重要ではありません。図37はイタリアで実施した調査ですが、ハンターによる捕殺とオオカミの捕食のどちらも、イノシシの個体群動態に影響しないことが明らかになりました。イタリアのイノシシの個体群動態は、ナラ類の堅果の生産量に左右されて、ハンターやオオカミに左右されることはありません。

No relationship between damages and harvest wild boars in Tuscany, Italy イタリア・トスカーニ地方でのイノシシ捕獲頭数と被害には相関はない

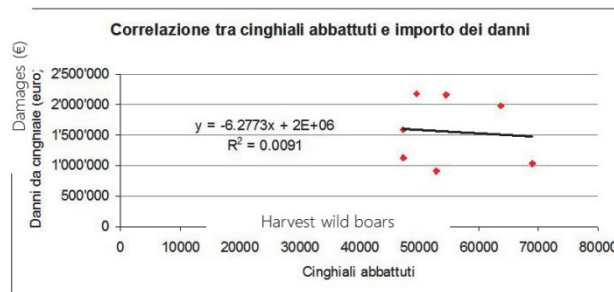


図34 イタリアにおけるイノシシ捕獲数と被害の関係

Wolf in Europe 欧州におけるオオカミ

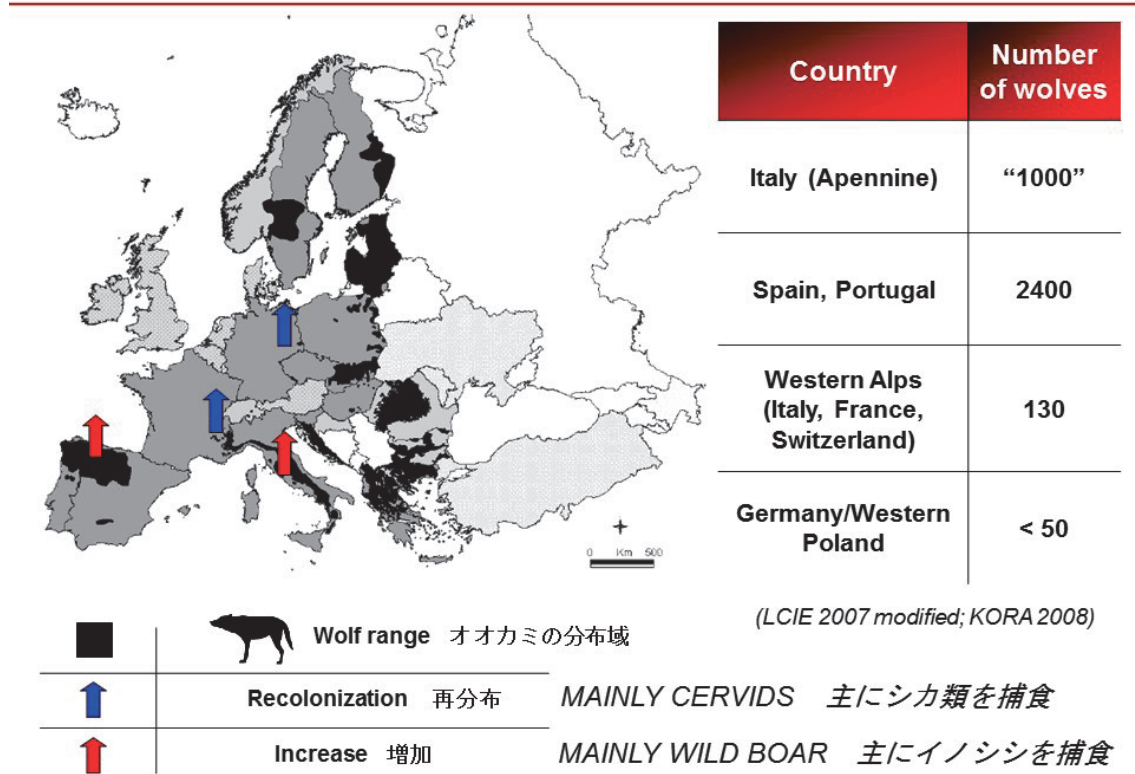


図 35 ヨーロッパにおけるオオカミの分布と生息数

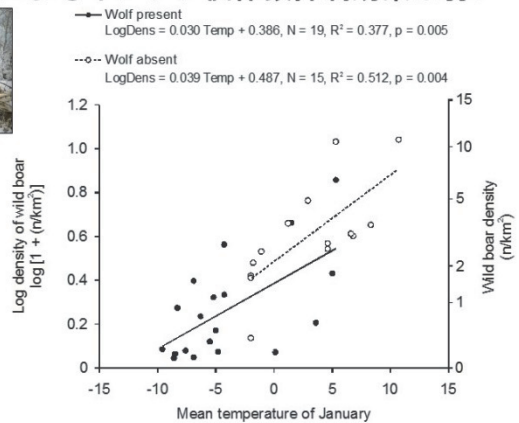
被害防除

最後に、被害防除です。イタリア及びヨーロッパでは、日本と同様のことを行っています。すなわち、フェンス、電気柵、餌付けによる他の場所への誘導、様々な装置を用いた撃退、です。イタリアやヨーロッパの多くの地域で、例えばワイン畑はフェンスで囲まれています。とても頑丈なフェンスで、高さは1.2メートルあり、イノシシの害から守ることを保証してくれます。しかしフェンスは、景観という点で多くの問題を引き起こしています。

餌付けは、地域によってはイノシシの防除効率を高めることが、実例で論文に報告さ

Predation by wolves has a weak limiting effect on populations of wild boar

オオカミによるイノシシ個体数抑制効果は弱い



Source: Melis C., Szafranska P., Jędrzejewska B., Bartoń K. (2006) J. Biogeography

図 36 オオカミによるイノシシ個体数抑制効果の有無の検証

れています(図38)。しかしヨーロッパでは、イノシシが農地で採食することを防ぐための餌付けはわずか25%であり、残り75%はハンターがイノシシの個体数を増やすため、もしくはイノシシを誘引して捕獲するために使われています。餌付けで個体数を増やすのはあまり賢いやり方ではありませんが、実際には行われています。例えばドイツでは、捕殺されたイノシシは、1頭あたり100kgもの人工給餌が行われていた計算になりました。また、餌付けは、イノシシの行動圏を変化させたり、イノシシを人馴れさせたり、イノシシの個体数を増加させたりします。

最後に、イノシシを罠で捕獲します。昔ながらの罠も使えば近代的な罠も網も、このように使います(図39)。

本日はご清聴、本当に有難うございました。

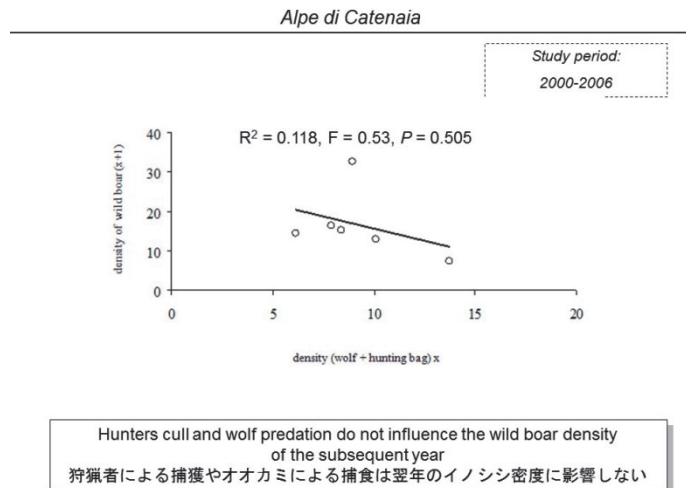


図37 ヨーロッパイノシシの生息密度に影響する要因

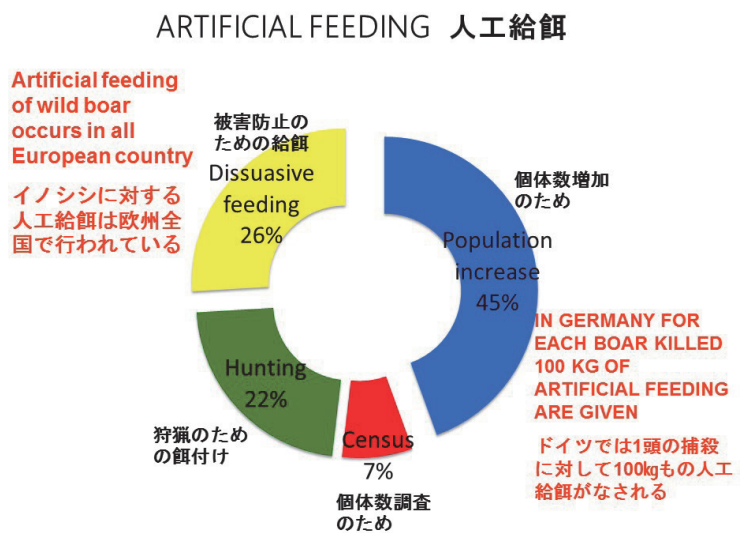


図38 ヨーロッパイノシシの生息密度に影響する要因

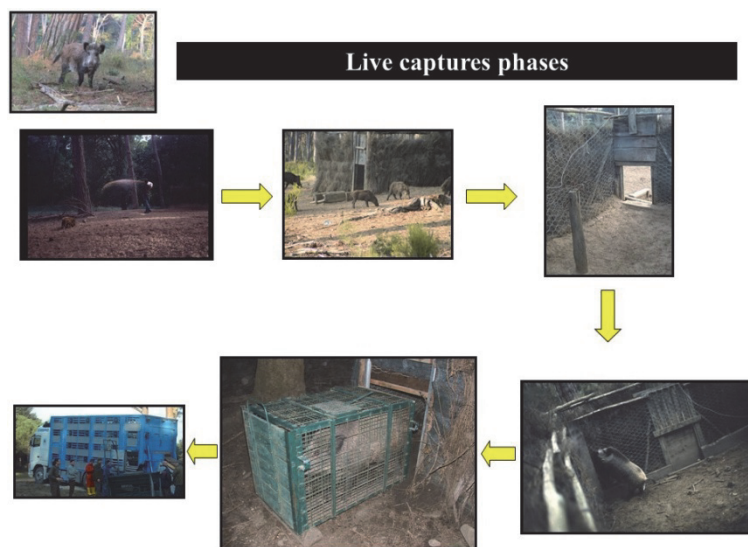


図39 ヨーロッパイノシシの生体捕獲の例